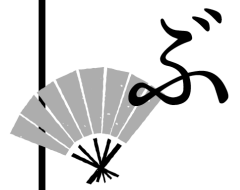


# 古典落語



# に学



落語家  
立川談四楼

## 第三十六回 子(ども)争い

### 落

語の親類に講談という芸能があります。兄弟と言って  
もいでしょう。今回はその兄弟のはなし噺です。

皆さんはおおおかさま大岡裁きというものをご存知でしょうか。講談にも

落語にもある一大ジャンルで、南町奉行のえちぜんのかみ大岡越前守が裁き  
(今でいう裁判)をするものです。

ある所に、子どもがいました。子を産んだ母親は一人ですが、  
どういうわけか、母親を名乗る女性が二人現れました。双方が  
「私こそがこの子の母親よ」と言って譲りません。

二人の母親の争いは収まらず、ついに南町奉行所に持ち込ま  
れ、大岡越前守が裁くことになりました。越前守は二人にこう

提案します。

「その子の腕を一本ずつ持ち、それを引っ張り合いなさい。勝っ  
た方を母親として認めよう」

越前守の言葉に従い、二人の母親は子どもの腕を引っ張り合  
いました。子どもはただでは済みません。「痛い痛い」と泣き  
叫びました。すると一方の母親が腕を離してしまいます。

引 っ張り合いは終わり、腕を離さなかった母親は喜んで  
子どもを連れて行こうとしますが、そこで越前守が声

をかけます。

「待ちなさい。その子は手を離れたこちらの母親のものだ」

腕を離さなかった母親は納得がいきません。引っ張り合いに勝ったのですから、当然食いさがります。すると越前守は、「私は『引き寄せた方が勝ち』とは言っていない。それに本当の母親なら、子どもが痛いと泣き叫んでいる行為を、どうして続けられようか」と言いました。

越前守は、母親の持つ子どもへの愛情をすっかり見切ったのでした。これにて一件落着！

こ

れが世に言う『子（ども）争い』です。江戸時代において智慧（真実を見極める力）をフル動員、誰もが納得する決着は見事だと思えます。大岡越前守の面目躍如ですが、今と違って法の不備もあったでしょうに、人を見る目の優しさや厳しさがよく出ているネタだと思えます。

落語や講談の元ネタの多くは中国由来のものと言われています。特に落語は中国の笑話を元にしており、この噺の典故が中国と聞いても驚きませんでした。むしろ日本人の共感を呼ぶアレンジに感心したぐらいです。

ところが今回、思わぬ事実が判明しました。この噺の元ネタが「旧約聖書」にあるというのです。これには驚きました。旧約聖書の中の「列王記」によるソロモン王の叡智なのです。互

いが実子と主張し、一人の子どもを取り合う二人の母親に対する調停の伝承（いわゆる裁判物語）が旧約聖書に記されているというのです。

それらがイスラム圏を経て中国に入り、日本へ伝わったということです。

また一方で永祿三年（二五六〇年）のクリスマスに、豊後（現在の大分県）でイエス会の宣教師がソロモンの裁判劇を行ったという記録も残っているそうで、子（ども）争いの元ネタは西から東へと入ってきたと言えます。

し

やあ、驚きの連続でした。思ったのは、いい噺には国も宗教もないということです。

いいものはそういったものを軽々と飛び越えて伝わってゆくのです。そしてその国に合うような形で根付くということなのでしょう。

今回の噺は、お子さんたちにはまだ早い噺かもしれません。いや、もしかすると家庭の事情などで親権問題に悩んでいる方もいるかもしれません。

母親の子どもに対する愛情にスポットを当てたこの『子（ども）争い』は普通のテーマだと思えます。愛情は世界各国の母親に共通する感情なのですから。